

問題本根の學科神

特210

369

學生生活叢書第三輯

會協生學本日



始



特210  
369



精神科

學の根本問題

學生生活叢書第三輯

日本學生協會



## はしがき

所謂政治新体制の實現により、出來上る新黨が幕府的存在とならぬ様にするため首相は苦慮してをると新聞紙に報せられてゐるが、幕府的存在になるかならぬかといふことは全く思想問題であることを忘れてはならない。

翼賛體制といふものをいくら機構的に作つても、翼賛意志が欠けてゐる時には意味をなさないことは自明のことである。それ故我等は終始一貫思想學術改革をしてすべての政治革新の根幹たらしめよと叫び來つたのである。

青年の敏感なる叡智は、決してマルキシズム的固定理論により屏息せしめ得るものではない。國內に浮動する思想思潮に不斷に反撥し、或は共鳴し、或はそれを分析せんとして苦闘しつゝあるのが現代日本の青年である。

この苦悶の中に近代の相言葉たりし知性は次第に色あせ、消失せんとしてゐる、何となればこの苦悶は至情意を傾けつくす、生死を賭するたゞかひによらねば解決

出来ぬ程深刻なものがあるからである。

従来學園は花園の如く愛撫されて来た。マルキシストの表面的屏息後は將に寂滅の静寂を中にたへへつゝ、深山の沼澤の如き静止固定の状態をつゞけて来たのである。而してその静止固定の原動力は實に反國體誤謬思想であつたのである。

かくて所謂學園は國を擧げての戦をどうしても實感出来ぬ學生をつくり上げてしまつた。外國にさゝげた若き魂を再び奪回せよ、我らは悲しくもかく叫ばねばならぬのである。

去る七月十六日より二十五日にかけて行つた、信州菅平夏季合同合宿は全國學生四〇〇名が、失はれた魂を再建すべき必死のたゝかひであつたことは既報の通りであるが、そこに開かれた不可思議の世界は、合宿參加の全員が心に味ひ、いひ知れぬ歡喜に打たれつゝ將來の協力を誓つたのである。

學問とは何ぞや、まことの學問とは何ぞや、といふことを毎日毎日反省し、あら

ゆる疑問を吐露し合つた合宿の日々をしのび未だ見ぬ友らの心をしぬび我らの意志をあますなく友らに傳へむとして本書を編輯しつゝある。

この皇國の危機に對し我らの態度として無確信といふことは、不忠に外ならない。亡國フランス、戰敗國フランスの運命とその文化内容とを究明せよ。而してフランス文學の我國に於ける流行を深思せよ。

祖國日本、その生命は永久に不滅である、かく信ずることは同時に、不滅ならしめむと意志することではなければならぬ。この意志を振起せしむることこそ第一になされねばならぬことである。しかもかゝる祖國防護意志の、燃ゆるが如き全國的勃興は未だ未だ見られないのである。かなしく雄々しき戦ひは更に更に展開されねばならぬ。その用意は充分整つてゐる。本書の後に次々に續刊が用意せられてゐる。その豫告を兼ねて本文を第三輯編輯のことばとしたい。

昭和十五年八月十日

編者

目次

はしがき……………一

第一節 精神科学研究方法……………(一一—三)

序……………一

一、「科學」或は「科學的」の意味……………三

二、形式科學の性質……………六

三、實質科學の性質……………八

四、自然科學と精神科學との差異……………九

五、精神科學の研究上の諸問題……………二

第二節 精神科學の任務たる思想批判戰の實踐……………(一四—五)

一、西田哲學批判……………一四

イ、西田氏の人生觀……………一八

ロ、「善の研究」を中心として……………二

ハ、結語……………三五

二、流行日本主義批判……………二六

三、流行文學點檢……………三六

イ、ジイドとブルジェ……………三六

ロ、ポール・ヴァレリー……………四〇

ハ、ヘルマン・ヘッセ……………四〇

ニ、林語堂……………四〇

ホ、結語……………四三

## 精神科學の根本問題

### 第一節 精神科學研究方法

#### 序

こゝに云ふ精神科學は普通、文化科學社會科學の名の下に呼ばれてゐるのであるが、これから説明するやうに、本科學は我々の直接經驗に則して、廣く人類文化を研究對象とし、綜合的に之を把握せんとするのであつて、精神科學と呼ぶのが適當であると思ふので以下精神科學といふ名を用ひることとする。

第一に、「科學」或は「科學的」と普通に云はれてゐる意義を究明することから出發して、形式科學としての數學の全科學内に於ける位置と性質、自然科學と精神科學との研究方法の根本的相違に及び、最後に、精神科學の研究方法の持つ獨自性を強調したいと考へてゐる。

之等諸科學の相互關係を明辨せずしてその研究方法を混亂せしむることからして如何に多くの誤解、誤謬が我學界に蔓延してゐるかを思ふとき憂心禁する能はざるものがあるからである。

「學問と人生觀は別である」とか「學問は合理的に研究するものである」とか「學說を反國體であると批判するのは非學術的である」とか、之等の諸々の迷信が依然として大多數の學者並にインテリゲンチヤを支配してをる現状こそ、正に科學研究方法上の誤謬に起因するものであることを諸君は今こそ適確に認識せられんことを要望して止まないのである。

本稿は能ふる限り體驗の告白といふ形をはなれて論理を展開し、一般の理解に資せんとするのであり、その意味に於いて最も初歩的な精神科學研究への手引きたらしめんとする意圖に出でたのである。

### 一、「科學」或は「科學的」の意味

科學といふ言葉は特にマルクスが「科學的社會主義」といふ名稱を提出して以來、その意義が紛更せられて來た。「科學性」とか「科學的」とか云ふことが恰もマルキシズムの眞理性を實證するかの如く、即ちマルキスト達の私有物であるかの如き觀を呈して來たのである。

例へば帝大に於ける諸講義に於いてすら「科學的」と云ふ言葉が「マルクスの唯物史觀に立脚せよ」と同意義に使用せられ來つたことが屢々であるし、今日と雖もなほこの殘滓は拂拭せられないのである。

最近の三笠書房發行の「唯物論全書」の如きは、この唯物史觀を、文學論、藝術論、戰爭論を始め、日本史、憲法史、社會史、道德論等文化の全域に亘つて適用し、五十餘篇の尨大な全書を刊行してゐる。そして彼等の常に標榜する合言葉は科學的研究といふのであるが、かゝる現状に對して依然として學術の最高府にある帝大諸教授は、積極的に批判析伏戦を展開せざるところか、自ら學府内にあつて、國際法上位説とか、世界法の理論とか、或は又日本古代史、神代史の抹殺論等を講

じつゝある現状なのである。ルネッサンスは神學の奴隷たりし科學を解放したと云はれるのであるが、再び直ちに理性迷信の學術的誤謬に墮してしまつたのであり、この迷信はその後一世紀を経た現代もなほ根強く學界を支配してゐるのである。精神科學が學術的正確さを以て、帝國大學に於て講ぜられるは未だしと思ふときわれらは痛憤やる方なきを覺えるのである。帝大に於ける精神科學の正しき確立は全日本に亘るあらゆる文化の改新を意味する。昭和維新が行はるべきであるとするならば、それは何を措いてもまづ第一に帝大改革を以て着手せらるべきである。帝大の改革は日本の言論界の改革であり、官吏の改革であり、總力戰體制樹立の根本的要請である。

かく思惟し、かく希求しつゝ、悶々の想を秘めて、戦ひつゞけてゐる若き學徒のみが、よくこの痛憤に打開の道を與へ得る唯一人者たることを思へば、筆とる手は、全國二千の同志の息づきにふるへるのである。

友らよ、次代の學術體系を背負ひて立つべき友らよ、今こそわれらは諸君と共に眞に正しき學術を確立すべく、決死の意氣を振ひ立たしめつゝ進み行かむとするのである。

○

所謂「科學的」と云ふ場合の「科學」が如何なる意味に使用せられてゐたかといふに、その大部分は科學の一部門としての自然科學或は形式科學を指してゐるに過ぎないのである。然もそれが本來の形式科學、自然科學の領域を逸脱して精神科學の領域に於てまでその研究方法そのままの研究が行はれ、兩科學の研究方法が峻別されてをらぬ始末である。かゝる研究方法に對する省察の缺陷から、正しき研究方法に則れる研究並にその成果に對して、それを非科學的なりと獨斷するの迷妄に陥るのである。

元來諸科學は夫々の分科に應じて、独自の研究方法を以てその研究を遂行するのである。之等の諸分科を混同して一概に「科學的」であるとか、ないとか云ふことは無意味の判定である。かゝる判定がもし是認せられるとするならばそれは夫々独自の研究方法のもつ非科學性、方法遂行の論理的誤謬指摘となつて現れてこなければならぬ筈のものである。

科學はその研究方法と研究對象との相違から大別するとき、次の如き概括的圖式が可能となる。





## 二、形式科學の性質

形式科學即數學は純粹理論の學であり、理論それ自體の必然的發展を追及してゆくものである。こゝで「理論それ自體の發展」といふ意味は、科學の分類に於て示された實質科學の「實質」とは無關係に、といふ意味であつて、この實質とはわれわれの經驗的事實を意味するのであるからして、經驗的事實とは無關係に論理を追及するところに數學の獨自の方法と性質とが存するのである。

例へば三角形といふ場合に、われわれの書く三角形は、それがボード上に或は紙上に具體的な形をとつて畫かれる場合、ともに經驗的事實として與へられた具象的三角形である。即ちこれらの三角形は常に具象性を有する。然るに幾何學に於て、「三角形ノ内角ノ和ハ二直角デアル」といふ場合の三角形とは、全然この具象性を除去したそれであつて、實際的にいかなる形の三角形であるかといふ事とは全く無關係に成立する命題である。

具象的三角形は一として同一のものではなく、實質的種々の差異を有するのであるが、それらの差異はこゝでは全然問題とすべからざるものとせられる。

かくして數學は當然時間空間を超越した純粹に論理的なる科學として規定されるのである。時間空間を超越し實質を捨象するのであるからして、數學が純粹に觀念的科學であることは勿論の事である。

幾何學に於ける「點トハ位置アリテ大キサナキモノナリ」といふ定義が最もよき例である。實質的にわれわれの經驗しうる點とは「位置アリテ大キサナキモノ」ではあり得ざるにも拘らず、さう考へられるといふ可能性の上に幾何學は建設せられるのである。

この數學の持つ觀念的性質は、如何にその體系が尨大になり、整然と建設されようとも、遂に振り捨てることの出来ぬ本質的性質なのであるが、この根本制約を忘れてその思考法或は成果をそのままに人生の諸事實に充てはめ、これを規定せんとするのは誤謬である。

數學に於ては常に $\infty$ であり數の大小關係が明確に把握されるのであるが、これはあくまでも抽象的數量關係に於てであつて、之を人生價値の世界にまで、そのまま妥當するものであると考へるとき政治問題社會問題に關して多數決萬能論の如き誤謬理論が生れるのである。

我々の經驗的事實としては、數の多寡は何等眞理を指示するものでなく、反つて少數者の方に眞

理が存する場合が多々あるのであるが、かゝる經驗的事實を無視して多數決萬能論を強行せんとするのは、形式科學と精神科學との研究方法の差異と眞理判定基準を混亂せしめたことに基因するものである。

### 三、實質科學の性質

實質科學とはいかなるものを説明しよう。實質科學は前述の如く自然科學並びに精神科學を含むものであるが、これら兩科學は共に實證科學であるといふ點に於て同一性質を有するのである。即ち實質科學に於ては如何に整然と構成された論理と云へども、それが實質即ち事實關係と矛盾する場合に於ては、その理論構成は誤謬であり、眞理と云ふことは出来ない。即ち自然科學並びに精神科學に於ける理論構成が眞理であるか否かといふ檢證は、之を事實關係との照合に於て行ふのであつて、この意味に於て兩科學は實證科學なのである。

自然科學に於ける「實驗」と精神科學に於ける「體驗」とが兩科學に於て夫々最も重要な位置を占むる理由はかくして明となるであらう。

かくの如く實質科學は實證科學なのであるからして、前述せる數學の如く合理的方法を以ては研究し盡すことを得ぬものである。例へば、カント哲學、マルクス主義等の根本的誤謬は、精神科學を研究するに當つて、科學性＝合理性と考へた所に存するのであつて、精神科學に於ては後述する如き超合理的なる精神開展の法則、例へば目的分化の法則、創造的合成の心理學的法則等が存することに氣付かなかつたものであると云へるのである。

### 四、自然科學と精神科學との差異

次にそれならば精神科學と自然科學とは如何なる差異を有するかについて考へて見よう。研究對象について云ふならば、兩者に根本的な差異を認めることは出来ない。兩科學は共に人生の事實を研究對象とするのであり、この事實とは共に經驗的事實をさすのである。たゞ精神科學は自然科學の研究の成果をも含めて、それを研究對象として綜合すると云ふ點が、兩者の研究對象に於ける相違である。

兩者の根本的相違は對象よりはむしろその方法に存するのであつて、自然科學に於てはその研究

に當つて、その研究主體たる「人」を一應抜き去つて考へる。即ち研究主體たる「人」の精神作用を客觀的研究對象に投影したり移入したりせず、對象そのものの性質を研究しようとするのである。自然科学に於て冷靜な研究が要求されると云ふのは即ち、かゝる研究方法の根本的性質から生れるのであつて、人間をその研究對象とする場合もそれを恰も自然現象であるかの如く研究するのである。生理學、醫學等の諸科學が成立するのはかゝる方法からして生ずる。

乍然、情感し意欲する人間及びその人間のつくりなせる文化を研究するに當つて、精神科學に於ては、研究主體たる「人」の心理をそこに投射しつゝ研究してゆくのである。例へば歴史學の研究に於ては、祖先の情感し意欲し痛感し喜怒した心情を正確に把握することが、第一に要請せられるが、それを達成するためには、自らも亦之等祖先と共に、その祖先の心情を己が心に甦生せしめつゝ又通はしめつゝ、之を研究し體驗してゆかぬ限り、その研究目的を達成することは出来ぬのである。古典研究も、國文學研究もその他精神科學、文化科學に屬する一切の學問は、この歴史學の研究と同じく、研究者自身の生活體驗と密着せしめざる限り正しくその學問を追究してゆくことは出来ないのである。

##### 五、精神科學研究上の諸問題

斯くの如く精神科學に於ては、研究主體の主觀を客觀的研究對象に投影するのであるからして、その研究成果は必然的に主觀的性質を帯びて來るのである。この研究成果の主觀性を如何にして脱却すべきか。如何にして客觀性を把持し得るに至るか。茲に精神科學研究上の、最も至難にして、最も重大なるポイントが存するのである。

そのためには先づ第一に、研究主體の精神そのものが、全體としての研究の對象と共鳴し共感し得る如き、博大なる精神感情を體現することが必要となつて來る。かくしてこそ始めて人生を眞にあるがまゝに認識することが可能となる。

乍然、かゝる客觀的精神は個人能力の充分には及び得ざる所であり、そのために論戰及批判といふことが重要な役目を有するに至る。精神科學上に於ける論戰は理論と體驗とを照應しつゝ、恰も自然科学上に於ける實驗の如く、主觀的なる判断を客觀的のそれにまで高めるのである。もとよ

り精神科學は人間心理の微妙なる相互關聯を研究するのであるからして、その研究は、一字一句をも忽せにすべからざるものであり、従つて一字一句がよく全體の思想意志を表現するものなることを銘記せねばならぬと共に、その論戰・批判に當つては、その對象たるべき内容を正確なる文獻に求め、あくまでも客觀性ある批判論戰を展開せねばならぬ。

かくして精神科學的研究において研究者に要請さるべき博大なる綜合的精神と、それを客證せんが爲の活潑なる論戰とは、密接不可分の内的關係を保ちつゝ統一的に我々のいふところの同信生活に於て實現せられんとするのであるが、この同信生活の有する意義と價值とについては、第一輯「新學生々活論」を参照せられたい。

かくして精神科學は研究者の人生觀と密着不離のものとなるのであるが、この點を明辯せずし學問と人生觀は別であると云ふ様な、非學術的迷信が依然として我學界を風靡してゐるのが現状である。これこそ我學界の無哲學怠慢に歸因するものである。ヴントが生理學より出發して心理學を確立し、進んで晩年には時事評論の筆をとるに至つたといふことが、ヴントの哲學體系が飽迄現實國家生活から游離せずして之と密着不可分の關係に於て展開せられたことを示すのである。研究者は

まづ人間であり具體的には國民であるから、その屬する國家に對する政治的關心を欠いてはその人生觀は現實游離の誤謬に陥り、恰も自己が學者なる特種の人間の如く錯覺して、茲に自己神化に誘はれる學者に共通の欠陥が胚胎するのである。

それ故に現代迷信打破作業としての思想批判時事評論に従事することこそ實に精神科學本來の任務にしてその實踐的精神の要請であつて、以下第二節に於いて現代流行思想文藝に對する批判を展開する所以である。

## 第二節 精神科學の任務たる思想批判戰の實踐

## 一、西田哲學批判

哲學の専門家といふものは本來あり得ぬのである。哲學といふものはすべての學術に内在する根本原理を追及するものであるが故に、それらの具體的研究を基礎として開展すべきものである、しかるに一般にこれまで行はれて來た方法は、哲學と科學を切離された部門として對立させ、所謂専門哲學者といはるゝ人々が輩出し來つた。かゝる人々はともすれば、考へ方が抽象的に走り易いのであつて、そこに嚴密な自己批判が要請せらるゝにも拘らず、それを怠りつゝ、哲學専門家としての世間的名聲に依據して來た人も相當に多かつたのである。

こゝにその一例として我國に於いて西田哲學として幾多の追隨者を出してゐる西田幾多郎氏の思想を挙げ、これを批判しようとするのであるが、もとよりこの批判は決して萬全なものとは思はない。たゞ所謂哲學者といふものがいかに現實の具體的問題についての判斷が迂遠になつてしまふか

といふ點を指摘したのである。西田氏の認識論は、具體的意識の嚴密なる統一にもとづく、主客未分の純粹經驗に出發し、そこに眞實在とは意識現象に外ならないと斷するのである。而してその實在は矛盾によつて成立するが、その矛盾はつねに統一せられゆくもので、その矛盾と統一は同一の事柄を兩面からみたものに過ぎないのであつて、こゝに絶對矛盾の自己同一といふことがくりかへし博士により説かれるのである。

この場合博士の思想の最も不備な點は、この「矛盾」と「統一」といふことの内容及びその具體的心理的聯關に言及せず、矛盾とか統一とかいふ語が一つの抽象概念となつてしまつてゐることである。

西田氏によれば「統一する者と統一せらるゝ者とを別々に考へるのは抽象的思惟に由るので、具體的實在にてはこの二つの者を離すことは出來ない」のであつて、例へば樹は單に枝葉根幹の集合ではない、そこに樹全體の統一力といふものがあつて、それが枝葉と不可分に存するといふのであるが、かゝる「實在」の觀念からして、主客合一に言及しそこに矛盾の統一を説くとき、人間内心に味はるゝ人生上の深刻なる矛盾をいかにして統一してゆくかといふ悲痛なる體驗をも、樹木か

何かをわきから眺めるやうに「矛盾即統一」と簡単に片づける様なことになつてしまふのである。

それのみか後にも擧げる西田氏の歌にある様に

赤きもの赤しといはであげつらひ五十路あまりの年を經にけり

といふ、まるでわざ／＼矛盾をつくつてそれを弄んでゐる様なまことに意味のないことになつてしまふのである。

岩波新書版の最近の著「日本文化の問題」中にも、日本の歴史的世界は人間即自然、主體即環境として自己同一的に發展して來たとかいてあるが、人間即自然といふ様に、人間と自然との關係を簡単に「即」といふ語で結んでしまつたのでは、自然をことむけ自然とたゞかひ、自然を統御する人間の意志的活動による文化創造の苦闘といふものが少しも表現せられない、かういふ簡単な表現で一切すましてをられるのは西田氏自身の體驗の問題となつて來るのである。

明治天皇御製

山路

今も尙ほふみわけがたき深山路を開きし人の昔をぞ思ふ

農夫

山田もろしづが心はやすからじ種おろすより刈りあぐるまで

を拜誦しまつり、日本文化の開展の過程をもつと内容的に緻密に論すべきである。こゝで絶対矛盾的自己同一といふ様な妙な論理は一擲した方がよいのである。

哲學研究は信念體驗の告白をその根底とすべきである。精神科學の正しき研究方法はかくして成就されてゆくであらう。

ともあれ西田幾多郎氏の哲學思想は、現代日本の哲學界に牢固たる勢力を有するものであるからして、その内容を検討しつゝ、更にこれを開展せしむることは重大なる文化史的意義があると信ずる。

殊に最近西田哲學が日本の代表的哲學としてドイツに紹介された事實に鑑み、果して西田哲學が世界に誇るべき内容を有するや否やを日本國民は是非とも検討する必要がある。

順序として先づ氏の哲學を根底づけてゐる人生觀の内容を剖檢し、逐次その理論の批判に及ばざんとするのである。

## イ、西田氏の人生観

眞宗の家に生れ、熱心な眞宗の信者たる母上を持つ氏は、親鸞聖人の言葉には非常に影響をうけてゐることが、その著書をみれば分る。「思索と體驗」なる著書には特に右のことが強調されてゐるが、その中でクリストはまだ正義を重んじ、人の罪を責める心が強いが、親鸞には絶對的愛があるといふ様なことを説いてあるのは、親鸞に對する見方の皮相なることを示してゐる。親鸞の悪人正機の思想は絶對的愛といふ様な概括的表現を以ては盡し得ぬものである。親鸞は南都北嶺のゆゑしき學匠たちと深刻なたゝかひを一生つゞけたのである。概念抽象理論を以て人生を律しようとする學匠とのたゝかひが西田氏にはついに分らぬのである。

同じく思索と體驗の中に集録せられた「國文學史講話」序には、明治三十七年旅順にて戦死された令弟とそれにつゞいてなくした愛兒に對する切々たる痛惜の情がつゞられてある。そしてそこに自分が功名名利を追ふ心を失はしめられひたむきに哲學へとすゝむ契機を與へられたことを告白してゐる。人生の無常を感じ人生の悲痛を體驗して哲學に志した人は相當に多い。西田氏もその一人

であるが、氏の愛兒を思ふ情意は國家の史的生命につながることなく、祖國防護の意志により統一せられてゐない爲、厭世的隱遁的感情に低迷してゐるのである。氏の大正時代の和歌

なべて皆秋はさびしきものなるを分きて今年秋はさびしき

思ひ出の影は美しなべて皆うれしかりしも悲しかりしも

赤きもの赤しといはであげつらひ五十路あまりの年を經にけり

しみじみとこの人生を厭ひけりけふこの頃の冬の日のごと

世をはなれ人を忘れて我はたゞ己が心の奥底にすむ

等に最もよくその厭世隱遁思想があらはれてゐる。「しみじみとこの人生を厭ひけり」では親鸞の絶對的愛も何もないではないか。

又世をはなれ人を忘れてたゞ己が心の奥底にすむといふのは、衆生濟度を思はずつねに山林にかくれて我獨り清しとする思想である。かゝる弱い思想生活は大正より昭和にかけての彼のマルキシズムの猛威に對抗することは出来なかつたのである。氏の昭和四年マルキシストの青年の來訪をうけた時の歌に

夜ふけてまたマルクスを論じたりマルクス故にいねがてにするといふのがあるが、マルクス故に夜もねられずと悲鳴をあげつゝ結局マルクスをどうすることも出来なかつたのである。

それは「思索と體驗」「續思索と體驗」等の中にくりかへし説く如く學問はそれ自身の目的の爲にせよ政治上の目的のためにするな、とか、いかに非常時なりといつても、あまり焦つて反動的になるなといふ様な考へ方が結局マルキシズムに對抗し得ず、その魅力圏内に顛落することゝなるのである。世を厭うて哲學に志すことを誇る様になればそれは立身出世を求むる心と何ら異らなくなる。かくて哲學者として一代の尊敬をうけて來た西田氏も全國民が忠か不忠かにその思想批判の基準をおかねばならぬ未曾有の國難に際しその態度を明かにすべきである。

世をはなれ人を忘れて己が心の奥底にその逃避所を見出した西田氏は世の人から學者とよばれ博士とよばれつゝ、しかも自ら足れりとせず 陛下の廣大なる聖恩を思ひ時局の重大を思ひ、沒我奉公の誠心をふるひ起して己が心の奥底なる最後のより所「自我」をも一擲打破すべきである。背私向公の學術的意義はかくの如きものである。この自我を一擲し得ざる限り、西田哲學はカント哲學の

亞流として時代の急轉と共に取り残される外あるまい。

#### ロ、「善の研究」を中心として

以上氏の歌を中心に論じたる後氏の倫理學ともいふべき「善の研究」を中心として氏の思想を論ずることとする。

氏が赤きもの赤しといはで五十路あまりの年を経にけりと歌によむ如く、思索といふことが氏の生命である。しかしその思索が核心を衝いてゐるとは決していへない。

たとへば本書六二頁に於いて哲學と宗教との關聯に言及し基督教は始め全く實踐的であつたが、知識的満足を求むる人心の要求は抑へ難く、遂に中世の基督教哲學なる者が發達した。

といふが、クリストが學者パリサイ人といかに深刻な戦ひをくりかへしたか、といふ事がついに西田氏には分らぬのである。

知識的満足を求むる要求により發達したといふ中世のクリスト教哲學に對する批判は氏には不可



能である。それは豫言者たちを殺し石にて搏つものと、悲しきたゝかひをくりかへしたクリストの精神が分らぬからである。而して更に、釋迦以前の印度宗教哲學、中世に於けるクリスト教哲學支那宋代以後の儒教等を知識と情意との一致を求むる深き要求に根ざせるものであるといふ。これ全く氏が世界文化史上に於ける宗教改革者の意志欲求を解する能はざることを物語つてゐる。プラーマンを宇宙の本體とする印度宗教哲學を打破した釋迦の精神、マルチンルーテルにより改革せられた中世クリスト教の情落とクリスト神學との關聯、宋代學術を批判せる山鹿素行の情意等はすべて西田氏にとつては未知の世界である。

本書に於いて「純粹經驗」を第一編に説きその中にて思惟、意志、知的直觀等を説くも、氏の説く思惟、意志、知的直觀等はその一般的性質を概念的に説くのみであつて氏自身の體驗とは遊離してゐるのである。氏は意志を説く、意志とはかくかくのものであると、しかも氏自身の意志する方向に對して具體的に反省は加へてゐない。それ故氏が一度具體的問題にふれると一つ一つ失望させられるのである。例へば右に擧げた宗教と哲學との問題もさうである。又一八七頁に

忠孝といふ如きことは固より當然の義務であるが、其内には種々衝突もあり、變遷もあり、さて

いかにするのが眞の忠孝であるか決して明瞭ではない。

といふ様なことも、赤きもの赤しといはで五十路あまりの年をあげつらつて來た氏の面目をあらはしてゐる。いかにするのが眞の忠孝か分らなければ小學生に聞けば案外早く分るのではないか。大君に仕ふる道に色々變遷があるから現在明瞭でないといふなら重大問題である。これが分らねば氏のあらゆる思索は實にこの一點に集注せしめ、深痛の苦悶に耐へつゝそれを明らかにすべきではないか。一九六頁にも

西行法師が何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさになみだこぼるゝと詠じた様に、道德の威嚴は實に其不測の邊に存するのである。

といふが、西行がうたつたのは道德の威嚴に非ず現實に伊勢皇大神宮に參り、その尊嚴に涙流したのである。しかし西行のかゝる歌は思想的にも又歌としても成つてゐないのであつてこんな歌に對する批判力すらなく、しかも之を持つて來て自分の哲學を權威づけんとするのは不見識といふべきである。又二五二頁には

國家は今日の處では統一した共同的意識の最も偉大なる發現であるが、我々の人格的發現は此處

に止まることはできない。尙一層大なる者を要求する。其は即ち人類を打して一團とした人類的社會の團結である。此の如き理想は己にパウロの基督教に於て又ストイック學派に於いて現はれてゐる。併し此理想は容易に實現はできぬ。今日は尙武裝的平和の時代である。

とあるが、パウロの教、ストイック學派は共に個人の解脱完成を最高理想とするもので、社會の團結の原理とはなり得ぬのである。

右につゞけて

遠き歴史の初から人類發達の跡をたどつて見ると、國家といふものは人類最終の目的ではない。

人類の發展には一貫の意味目的があつて、國家は各其一部の使命を果す爲に興亡盛衰する者であるらしい。

といふ。人類發展の一貫した意味目的の内容は如何又その一部の使命をはたす爲に國家は興亡盛衰するもの「らしい」といふ最後のらしいは實に無確信の表現である。日本は如何であらうか、といふことを西田氏は考へたことがあるのか。しかし右の如く言つたまゝでは氣になるらしく、又それにつゞけて

併し眞正の世界主義といふは各國家が無くなるといふ意味ではない。各國家が益々強固となつて各自の特徴を發揮し、世界の歴史に貢獻する意味である。

といつて、パウロやストイックとはおよそかけはなれた様なしかも月並な結論をそつとつけて胡魔化してしまつてゐる。かゝる云ひ加減な考へ方をしながら眞の忠孝はいかなるものか明瞭でないといふあげつらつてゐるから、マルクス故にいねがてにする、といふ如き神經衰弱的敗北思想家となつてしまふのである。

## ハ、結 語

氏は本書の終りに宗教を論じ、宗教的要求は我々の己まんと欲して己む能はざる大なる生命の要求であるといひ親鸞の言葉クリスト教を例に引いてゐるが、親鸞クリストをして己む能はざる心を持ち立たしめた批判の對象となつたものは何か、といふことを氏は再思三省されたいのである。而して、實にその批判の對象こそ「赤きもの赤しといはであげつらひ」と自身告白せる西田氏の如き思想であつたことに愕然として目覺むべきである。

氏は「思索と體驗」の中で令弟が明治三十七年旅順の役に戦死され遺骨も收められなかつたことに對し斷腸の悲しみを叙してゐるが、その心事は深く諒とすべきも名譽の戦死といふことに一言も觸れられぬことに對する不満はどうしても拂拭出來ぬのである。肉親の死はかなしきものである。しかしそれが大君のみたてとなりて戦死せしときは涙ぬぐひて雄々しくもその後を追ひ共にたゞかはむと決意前進するのが戦死者に對する無上の慰靈ではないか。

## 二、流行日本主義批判

最近大川周明氏が「日本主義者」としてジャーナリズムの表面に浮び上つてきたのであるが、その思想が「不敬思想」なることは、既に識者によつて指摘せられたる所である。そこに大川周明氏がジャーナリズムに迎合せられた理由があるのであつて、今や東亞聯盟論者さへもが日本解消を意味する「昭和維新」を説く時代であるから、日本主義昭和維新といふ様な合言葉のかもしれない。氣によつて結合せらるゝ時代ではない。

眞の「日本主義」について研究を進めようと思ふならば、岩野泡鳴が第三期日本主義と呼んでゐ

る三井甲之氏を中心にする「人生と表現社」泡鳴の「日本主義」、それらにつゞく「原理日本社」の現代史を貫く至純の國民的意志と學術活動とをその文献に仰ぎ、直ちに、同信協力活動に没入せねばならぬ。この現代に及んでゐる「第三期日本主義」は三井甲之氏の「九月十三日」、川出麻須美氏の「暗夜」、泡鳴の日本主義の中の言葉に表現せられてゐる如く、明治天皇崩御にめさめしめられた國民的情意のさやりなき開展であつて、三十年に亘る思想戦の持續である。こゝに我らは思想戦の源流をつないでゐるのであつて、「シキシマノミチ會」の活動は、大みいつにすべをさめしめられて、世界史を統一せんとするのである。筆が少しそれたのであるが、大川氏が「日本及日本人の道」に、忠君と愛國とは別のものだ、と云つてゐることが、重大なのである。日本主義は日本精神科學臣道の學でなければならぬ。「忠」と云ひ「臣道」と云ふ吾らの生命を宇宙人生につなぐべき此等の言葉を、嘲侮の對象とする現代思潮は、自稱「日本主義者」をもその勢力範圍に併呑したのである。いまは右翼とか左翼とか云つて安心してゐる時代ではない。生を賭する論戦の展開が、急務であり、吾らの生命のゆくべき道を護るべき道は、思想戦の展開である。愛國と忠君とが別であると云ふ危険思想は、最近「日本主義文化宣言」を出した、倉田百三氏の言論にも見らるゝの

であつて、「祖國を愛す」とくりかへし云ふ氏の言葉がその適例である。愛國の實質内容たる忠義臣道を高揚すべきが、日本主義者の責務であつて、それは直にインテリには通はぬであらうが、必ずインテリの心肝を震駭せしめずにはをらぬ。倉田氏が、祖國愛を告白しつゝインテリに通ふ言葉を摸索して、遂にユートピアン化インテリ化してゆくのは、學術的批判を怠るからである。「批判よりも建設を」と云ふ様な迷妄に偏執してゐる人等は、この人生の心理的事實に覺醒せねばならぬ。倉田氏が現代の思想的混亂個人主義民主思想化を他に見て、ユートピアを説くといふことは、氏の思想が祖國防護の意志によつて一貫せられてをらぬ證左であると云はねばならぬ。仇は既に吾らの身近に迫つてゐるではないか。倉田氏が、「日本は最早マルクス主義の浸潤を恐れる必要はない。日本國體の眞價はもはや國民に儼として印銘し、マルクス主義が之れに打ち克ち得ないことは、數年前の嵐によつて試験済みとなつた。」と云ふ思想が危険である。事實として、マルキシズムは「東亞協同體論」「東亞聯盟論」の旗の下に又各所に擡頭しつゝあるではないか。否、氏の思想そのものが赤化しつゝあるのだ。即ち、氏は前の言葉につゞけて、

「又、その（マルキシズム・ソヴィエット）營利否定の精神に到つては、日本の現段階として、寧ろ皇道經濟を刺撃する外因として歡迎すべき位のものである。若し日本がマルクス主義の感染を恐るゝならば、外でもない、これに優る皇道經濟を一日も早く布けばいゝのである。然らばマルクス主義の浸潤する餘地はなくなるであらう。しかも皇道經濟體制は一日も早く布かるべきものであり、日本國體の眞姿は之れによつてのみ、初めて、具體的に顯彰されるものであるならば我々はマルクス主義を怖れる何の理由も持たないと云ふべきである。」（日本主義文化宣言 二九九頁）

氏が、氏の言葉を以てするならば「新知識階級道」を唱導して、現代思潮の腐敗墮落を叱咤しつゝ、躬ら「宣言することの意義」を根底から否定し去る如き論を吐くに至つたといふことは、その氣分中心の思想的素質によるが、又、インテリを救はうといふ様な自負心の放散せる結果にすぎぬ。インテリが思想的に墮落してゐると云ふならば、残された道は批判であり戦であり決して「暖い手」を差し出してはならぬ。「暖い手」は、氏にとつても遂に、妥協であつて、眞に協力覺醒する道ではなかつたのだ。氏の論調には熱があり、「愛國的」と云ふべきであらうが、敬語用法の正確と價值批判を伴はぬ人名列擧は氏の非學術的態度を表示する。又、例へば、新知識階級道の精

神原理を氏は何故開示せぬのであるか。原理は忠である。インテリは大衆を指導するものではなく全國民の協力共感の世界を實現すべく献身せねばならぬのである。それらについては今充分に述べえぬのであるが、尙先の氏の經濟觀の批判を進めよう。

氏は「新日本の當來圖」に於いて營利商業貿易は倫理的に正しくない、故にそれは否定せられねばならぬものとし、

「われ／＼が現在の資本主義文明を呪ふのはそれが、物的、經濟的のもの、精神的、價值的のものへの蹂躪だからである。われ／＼の救ひ出したいのは精神的價値である。物的、經濟的のものも依然として精神的價値を支配する變革では甲斐がない。しかしながら、われ／＼は物的、經濟的のものをなみする氣はない。それが當然持つ「強き價値」は承認するものである。精神的の「高き價値」を實現せんがためにはわれ／＼は（神の掟にしたがひ）先づ「強き價値」の實現をはからむと欲するものである。此の意味に於て、物的、經濟的機構の改革は當面の最初のわれ／＼の課題とならざるを得ぬ。

すなはちわれ／＼は「高き價値」實現のために、最も好都合であるやうに、現在の資本主義の經濟機構を變革せんと欲するものである。之れなくしてはわれ／＼の本來の念願たる精神的價値を實現することは出来ないからである。

従つて文明批評家にとつては、かやうな意味での、資本主義經濟機構の否定と、新らしき經濟機構の樹立と鼓吹とが任務となつてくるのである。」

氏自身告白する如くこの「ユートピア」が共產主義の防壘となり、これが日本の世界文化史に於ける任務であると云ふのであるから、赤化の魔手は氏の心奥に迫つてゐるのである。簡単に批判しよう。

(一) 氏自らかゝる言辭を以て資本主義の變革を企圖しようとするのは、「強き價値」の「高き價値」に對する蹂躪であるか。氏が「精神の物質に對する優位」を奪還せんと云ふのは、物的經濟機構の「高き價値」に對する優位であるか。

(二) 物的經濟的機構組織を充足運用してをるものは何か。その變革となすものは何か。

(三) 現代文明が一括して營利資本主義の下にあるならば、氏自身の「日本主義文化宣言」は「惡の華」であるか。

(四) 營利活動が倫理的に惡にして、それが、「高き價值」を「規定」「蹂躪」してゐるならば、「高き價值」は如何にして生じたるか。

(五) 商人資本家はすべて非國民なりや。

無制限の營利主義と云ふ様なものは、あるか無いか知らぬが、國家的見地から思想的に矯正されねばならぬのは云ふ迄もないのであつて、それが「精神による精神の改革」である。氏の資本家商人罪惡觀は、その「大衆觀」と共に酷薄なる内容をもつものである。事實として、かゝる人生觀こそが、國民的平等同胞感を阻止するものとして「日本主義」の打破の對象であることをおもはねばならぬ。氏もまたマルクスを批判すると宣言しつつ、赤化の魔手に操られんとしてゐるのである。

同じく「日本主義」の中で注意すべきは里見岸雄氏の思想である。

日蓮宗信者としてあり勝の如く社會主義に走り、しかも眩惑的抽象論理による國體論をふりかざして得體の知れない存在をなしてゐるのである。

氏が國體科學と誇稱してゐる「科學」の内容は、一口にいへば客觀的事實としてあるものを、普遍概念を以て抽象化するための不斷の勞作に外ならぬ。一例を挙げればその著「八紘一字」に於いて

國體とは國家が窮極的にもとづく社會的實體である。(四二頁)

と云ふ

國體の概念を明かにしたり、その内容、實體を闡明したりする學問的操作が、今日迄等閑に附せられ、國體といへば、單にわれわれ個々の信仰として片附けられてゐた爲めに、國體とは何であるかといふことを客觀的に明かにする事が出来なかつた(三九―四〇頁)

と云つてゐる、氏が國體といふことについては個々の信仰と別に學問的操作として、概念的解明を試みんとする。その實體概念の内容は何かといふと、前掲の如く、社會的主體であるといふ。その基礎は何かといふと、氏によれば經濟的社會である。

つまり國體の土臺をなすものは經濟的社會なりと規定し、その經濟的社會を分析し批判して、國體の學的解明なりとする、さういふ處につねに氏の思想の後暗い點が存するのである。

氏の皇道論にしてもその通りで、曾て學生生活誌上で批判せられた如く「皇道は果して王道に非ざるか」といふ題で「東亞聯盟」創刊號に執筆し、結局皇道は王道と何ら區別する必要なきことを力説し、しかもその王道の内容をば

若し一國の統治——國內的には統治であるが、國際的には國交をも含む——がその基本社會的正と善とを原來的且つ發展的に把握任持した軌範を以て根本とする場合には之を王道と稱する。といつて、王なくとも君なくとも差支へない様な王道理念としてゐるのであるから、これは一種のなしくづしの反君主政の理論でもある。

それは里見氏が國體國體といかにも國體を重んずる様に説き乍ら、國家と國體はちがふ、國體の基礎は經濟的社會である、といふ様によつて概念的分類を行つて、少しも、素直に雄々しく大君にまつろはむとする意志が見えないどころか、反つてかゝる氣持を固定概念によつて抑壓しようとしてゐる所をみていへることである。

やゝ古いものであるが、「國體に對する疑惑」等の著書にあらはれてゐる氏の感情は相當に統一を缺いてゐる。同書中「國體論者の無氣力無智識獨斷傲慢不誠實を打破すべし」といふ論文の中にはみよ、無産者運動の峻烈澎湃たる力を！これは読んで字の通り無産者の運動である、彼等の至誠は敵ながら實に涙の出るほど眞剣なる事實ではないか。

といふ様な文句がみえてゐるが、これなど氏がマルキシズムに對する確信的批判力を缺いてゐる證

據である、マルキシズムに宣傳される無産者運動の中に至誠が果して見出し得るか、至誠とは正しきまごころをいふ。その正邪の判断をなし得ず敵ながら天晴れといふ里見氏の心中には既に敵と味方の區別が分らなくなつてしまつてゐるのである、それは右の文につゞけて

多くの有産階級、中流階級を包含する國體主義者等の、國體擁護の事業の爲に奉仕する使ひつぷりのケチ／＼してゐるいぢらしさを見て誰れか涙なきを得よう。

といふ様な言葉が吐かれてゐることからも分るのである。國體主義者が多くの有産階級中流階級より成るといふ様なことをすぐ考へるのは全くマルキシズムの影響である。金の使ひぶりなどでその價値を判断するなどはあまりにも淺薄である。

一言にしていへば氏の國體論には文化史的研究が缺除してゐて、それ故眞に正しい意味での思想的研究ではない。殊に唯物論、唯物史觀の批判は非常に不徹底であつて、そのもやもやした感情の上に、國體といふ概念が浮動してゐるのである。しかもその暗雲低迷の感情の奥底に貫かれつゝある意志がある、これは一寸人には分らないが、それこそ皇道と王道との區別を撤廢する如き所にあはれてゐる意志である。それはまことに念入りな民主主義思想意志である。「八紘一字」にも説

かれてゐるが、天皇の御本質は民と一體となられたる大君にまします、それ故日本帝國の統治者は、一體となつた君民である、といふ如き、凡そ本來の意味に於ける國體論者とはかけはなれた様な君民共治思想の持主が里見氏である。

この君民共治思想は、天皇機關説の根底をもなしてゐるのであつて、事實嚴密に検討してゆくと氏の思想は、天皇機關説に相通する所がある。氏の著「國體憲法講義」は、氏の國體論に基く憲法論であるが、皇國憲法第四條の解釋に於いて、シラスとウシハクの區別を論じ、それを統治權の主體の歸屬の問題に結びつけ、天皇が統治權の主體にましますとなすことはシラスの御精神に反し、それはウシハキ給ふことになるといつてゐる、天皇はウシハキ給ふのではない、といつて、それから直ちに、統治權は天皇御一身に歸屬せずと斷定するのである。統治權が、天皇の御一身に歸屬せずといふ思想は、天皇機關説である。

天皇が統治權の主體とならせ給ふことが直ちに、權力的霸道的支配を意味するウシハクことになると考へるのは、統治權の内容がよく分つてゐない爲であり又御統治といふことがよく分つてゐないからである。

長くも、天皇陛下は、兵馬、行政、立法、司法等あらゆる大權を御一身に統べさせられ、この世をスベヲサメ給ふのである、もとより輔翼の臣はあるのであるが、臣下が、天皇と同列に統治權の主體とはなり得ないのである、君臣の分はあくまでも正されねばならぬ。所が里見氏の所謂「科學的」研究には君臣の分を正さむとする意志があらはれてゐない。そして無暗と他の國體論者を無學なりとのゝしり、自分のみが學問的であるかの如くいふのである、しかし君臣の分を紛更する様な科學、學問は國體を毒するものである。

げに學問の誤りは亡國の基となるといふが、學問を濫稱しつゝ、その内容がかゝることになつたのではやらない方が餘程よいのである。

流行日本主義と概括してそれらの説を正さねばならぬ程、所謂日本主義の内容が誤謬に満ちてゐることを心から悲しまざるを得ない。而して里見氏の如く口を極めて國體論者、日本主義者の無學を罵倒するくせに自らの學問の内容がかくも間違つてゐるのであるから悲惨の極みである。

流行する學問も俗權と結びその流行が根強く國家權力内部に及ぶとき、改革はまことに困難なることを思はねばならぬ。あゝ、亂れたる世なる哉。



## 三、流行文學點檢

## イ、ジイドとブルジェ

アンドレジイドは一九三六年六月二十日マキシムゴルキイの葬儀に際し、赤色廣場にて演説したが、その中に左の如き一節がある。

「文化はながいあひだ、特権階級によつて独占されてゐました。教養をもつためには、ひとびとは餘暇を必要としました。しかるに多數の人々は、ごく少數の有閑人として生活を樂しみ知識を豊かにさせるために、あくせく苦しんできました。さうして文化や文學や藝術の園は一部のひとびとの占有物でしかなかつたのです。」

「一國民一國民の特殊な利益の上に、全世界のプロレタリア階級に共通する大きな要求が彼らを結びつけてゐると同じく——それぞれの國民文學の上にも、各國の特殊な文學のうちに呼吸してゐる眞に生命あるもの、眞に人間的なものよりなる文化が開花するものです。即ちスターリン

が云つてゐる。形式に於ては國民的で、内容に於ては社會主義的な文化が咲きいづるのであります。」

右のジイドの言葉により讀者はどういふことを知つたか。

ジイドは「文化は特権階級の独占物であつた」といひ「一國民の特殊な利益の上に、全世界のプロレタリア階級に共通する大きな要求が彼らを結びつける」といふ、正真正銘のマルキシズムの公式的表現をその言葉の中に發見するのである。ジイドの譯は續々と刊行され、非常な勢を以て讀まれてゐる。ジイドの流行は果していかなる結果をもたらすか、讀者は熟考すべきである。

又ジイドが右の文中に引用したスターリンの言葉「形式に於ては國民的で、内容に於ては社會主義的」に注意せよ。簡単な一言一句にも往々その全思想が現はれるものである。右のスターリンの言葉から類推すると今日のソヴィエトロシアの所謂國家主義的體制といふものはあくまでも「形式」であつて、内容はどこまでも社會主義共產主義なのである。

今日ソ聯は共產主義國でない。國家主義國家であると樂觀する人々はスターリンの洩らしたこの片言隻句をくりかへし吟味して考へ直すべきである。

ジイドのいふ文化擁護なることが、大きな國際的××勢力をバックとしてゐることはジイド自らいつてゐる所である。右の演説中左の言に注意せよ。

私は今ちやうどロンドンで開かれてゐる文化擁護の國際作家會議を司會することになつてゐましたが、偶々マクシムゴルキイ重態の報に接して、急遽モスコーにかけつけた次第であります。すでに幾多の輝かしい悲劇的な出來事を目撃してきたこの「赤き廣場」に於いて、そして多くの眼眦の的となつてゐるこのレーニン廟の前に立つて、私はロンドンに集つてゐる作家たちの名において、また私自身の名において高らかに叫びたい。——文化を擁護し、文化を新たに顯揚する義務と努力はまさに大きな國際的××勢力にかゝるものである。また文化の運命はわれわれの精神のうちにおいてソ聯邦の運命そのものとしつかと結びついてゐるが故に、われわれはあくまでソ聯邦を擁護しなければならぬ。」と、

ジイドを愛好する人々も、ジイドの司會する文化擁護の國際作家會議とは何か、それをバックする國際的××勢力とは何か、それとソ聯邦との關係は如何、といふ様な疑問は少くとも胸に浮べる位の敏感さを持つて欲しいのである。

ジイドの作品全般を通じて現はれてゐる主知主義的理知主義的傾向は、一般にコスモポリタンの反ファツシヨ反國家主義的文化至上主義者に共通な思想素質を有してゐる。

プロメテ、パリウド、モンテーニユ論等々の小品にもそれが現はれてゐる。「モンテーニユ論」中の左の一節を注意せよ。

「モンテーニユは孤獨な死を望んでゐる。家族の間でも寧ろ見知らぬ人間の間で、彼は「顔ヲ糞メ」たかつたのである。さうすれば、彼の臨終は一層自然であつたらうしまた自然であり得たに相違ない。そして、私は枕頭に家族の者が侍つてゐたために、彼の臨終が多少拘束され、歪められたかも知れないといふことを他のところで指摘した。」

モンテーニユの臨終に家族がゐたからその臨終は不自然だつたといふ、それは涙とか苦痛のしかめ顔を家族にみせて彼等を悲歎に沈めたからで、モンテーニユは家族にはたゞ微笑の思ひ出ししか残したくなかつたのであるとジイドはいつてゐる。死とか臨終とかの嚴肅悲痛な事實に際し、かゝるやゝこしい理窟をこねる心理は我々にはそれこそ不自然極まるものとしか考へられない。理知主義こそ不自然なものである。モンテーニユが自然に従つて來たと自分でいつても客觀的にはさうで

はない。そしてジイドにはモンテーニユの「自然に従ふ」といふことの心理的内容が批判出来ないのである。

ともあれジイドの政治的生活とその思想とその作品の流行は一言にしていへば多分にユダヤ的勢力をそのバックとしてゐる。それ故その作品個々についての内容的批評よりもその全體的流行宣傳とその影響とが特に重大視せらるゝ。しかしポール・ブルジェになるとその思想内容を異にし、その心理描寫はジイドの如く主知主義に留つてゐないで、人間の心の動搖といふものを如實に描寫し作者の信仰的態度も積極的にあらはれてゐる。

現在ひろくよまれてゐるブルジェの「死」の梗概を左に掲げる。

#### 内容の眼目——

生命、愛、死に就いて三人の人間の苦惱のあとをマルサル博士が一人稱に於て心理解剖的精確を以て叙述してゐる。

一人はマルサル博士の先生オルテグ教授で天才的な學者で、神経外科醫である。時は丁度世界大戦中でバリに於ける自分の療養所を野戦病院にしてゐる。學界の權威であり富豪で、四十四才に

なり、二十才のマルファン・トレヴィイス嬢を妻にした。しとやかなオルテグ夫人は有名な生理學者の娘である。夫人は夫を助けて甲斐々々しく病院で働いてゐる。

此の夫人のいとこにル・ガリック中尉が居る。戦場で生死の戦ひをなし負傷して此の病院に来る。敬虔篤信なるカソリック教徒であり、幼な友達のオルテグ夫人に愛を感じ乍らも自制してゐる。激しい信仰家である故に科學者であるオルテグ教授の無神論者的見地と事ごとに衝突する。教授は老年であつて二、三ヶ月もたぬ膀胱痛にかゝつて、科學者として死に對しては平然としてゐるが、若い妻の愛を心配し、心中を強ひる。夫人も夫を氣毒に思ひその氣になつてゐたが、丁度いとこが重傷を負ひ入院、その宗教的な雰圍氣にふれてゐる中、最初は父、夫の科學者としての無信仰に影響され、その氣持で夫に殉ずるわけであつたが、次第にいとこの信仰にひきづられて行つた。而も心中の秘密話を立聞きしたマルサル博士は懸命になり夫人の生残る事を切願する。

教授はル・ガリックと夫人との愛の萌芽を嫉妬し、人生觀について争ふ。然し、マルサル博士を通じてその氣持をきき、眞の夫人の愛を得られぬ事を悟つて、夫人の生残る事を願つて、そこに唯一の夫人に對する愛、親切を發見して「人生は淋しい」と云ふ言葉を残してひとりさびしく死期を

早める。ル・ガリック中尉も後頭部の重傷に堪へられず死す。夫人のみ生残り、ル・ガリックの信仰にひかれて戦傷者の看護に自己の天職を見出す。要するに無神論者と信仰家との極度の対立を描き、その中間にある夫人の氣持の働きにより作者の信仰的態度を表現す。ジードの如き主知主義に留まらぬ新時代の宗教的科學的人間的な心理の分析に絡始する。但し、戦争を通じての國家、宗教、科學觀が未熟の様に思はれる。宗教と科學の極度の對立の如きはその例で國家觀が低調、然しそれはフランス人の最高人生觀である。そして登場人物はいづれも熱烈な愛國者である。

最愛の夫人の愛を取りもどせないが、しかもそれに對する愛はすてずに、夫人の生き残ることを願ひつゝ、「人生は淋しい」の一語を残して死ぬ老博士の心情はジイドの思想では解決のつかない問題である。

死、科學と宗教、戦争、等の人生の大問題を取扱ふ作品の價值を決定するものは作者の體驗である。而してこの價值を判断するのは讀者の體驗にもとづく批判力に外ならない。

#### ロ、ポール・ヴァレリー

例へば「現代思想史概説」の中の「文學思潮」を書いた龜井勝一郎氏は、思想的には全くフランス國民化して現代は混亂の時代であつて、吾々日本人はルネッサンスを回顧して、そこに何等かの救ひを求むべきであると強辯し、現代世界の思想的混亂の中に「日本」を解消せしめむと企圖しつつ、現代の救世主としてポール・ヴァレリーを擧げてくるのである。ポール・ヴァレリーは現代日本の自稱小説家達にとつて、「救世主」である。といふことは、日本の思想的混亂の象徴である。ヴァレリーの「テスト氏」の如きは、自性唯心に沈溺したる觀念の遊戯であつて、思想的頹廢即ち國民的共感の世界から遊離せしめむとする毒素撒布者である。ヴァレリーにはかういふ「頹廢」しかない。彼は人間生活を主導する意志を否定して「知性」の遊戯に没頭するのみである。「見るものが私を惱ませ聞くものが私を混亂せしめる」と云ふテスト氏の言葉は、古の、現世厭離隱遁超脱の學匠を髣髴せしめるものである。かくして、ヴァレリーは現在の歐洲戦争に於いて、ナチス排撃に乗り出すことによつて、世界ユダヤ化に協力してゐる爲體である。即ち今年九月十三日パリから

放送した演説「不思議な戦争」の中に、その非學術的迷妄を誇らしげに暴露してゐる。彼の如きにフランス文學者ジード、モーロア等が押へられてゐると云ふことによつても、フランスの頽廢ぶりが窺はれる。ヴァレリーは云ふ。

「吾々はこれ（歐洲戦争）を次の數言に要約することが出来る。即ち戦争は自由なる諸國と自由ならざる一國との間に勃發したのだと。」

「この自由ならざる一國」とはドイツであり、ヒットラー總統はドイツ國民にとつて「國民の自由を奪ひ去つた」「思想的虐待者であり」「唯一人の怪物的な權力」によつて、國民をして、「一人の投機師の致命的なインスピレーションに全運命を托さ」しめてゐるのだ、と云ふヴァレリーの言葉は、淺薄批評の限りではない。獨ソ不可侵條約に關聯して我等のナチスドイツ觀は月刊雜誌「學生生活」に明言せられてゐるのであるが、ナチス革命の世界史的人道的意義について何等の研究をもしえぬヴァレリーが世界の救世主であるとは驚き入つた妄論と云はねばならぬ。ヴァレリーがゲーテを持ち出して「今日若しゲーテが生きてゐるならば、恐らく彼は牢獄に呻吟してゐるか、さもなくば吾々の處に避難してゐることであらう。」と云ふに對しては、彼に對して先づファウスト

一部の研究をすゝめると共に、ゲーテの次の言葉を引用して批判にかへたい。歐洲大戰が、英佛のドイツの「不合理」に對する戦であり、「發狂に對する理性の戦争だ」と云ふ、「理性」なる言葉に對する狂信を見るならば、ヴァレリーはゲーテの嘲侮の對象である。「ゲーテ對話抄」より

「獨逸人はたしかに變り物だ、深い思想と觀念を到る處に探し到る處へ入れ、人生をそれで無暗に重苦しくしてゐる。印象にひたつたり、楽しんだり、感動させられたり、奮起させられたり、更に教つたり、偉大なものへ煽動され鼓舞されたりするだけの勇氣を出したらどうだ、われ／＼獨逸人に、理論をもつと少なく、實地をもつと多く考へさしたら、それだけで可成りの救になり第二の基督のやうな高貴な人格の出現をまつ必要もないだらう」

ヒットラー總統とドイツ國民とを離間せしめむとする英國の對獨宣傳戦に使喚せられてゐると云ふ事實が彼の無學を實證してゐる。この無學あはれむべき存在にうつゝをぬかしてゐるのが日本の文壇であるといふことが非常時の内容である。フランス情報部に雇はれた文學者連の翻譯が無批判に日本に於て發行をつゞけられてゐることの意義を警戒せよ。

## ハ、ヘルマン・ヘッセ

廣々とした海の水平線が、また同じ様に強く私の心を捉へた、幼年の娘のやうに、私は再び青霞む遙かなる彼方で、開かれた門のやうに私を待ち受けてゐるのを見た。すると再び、自分は人々の中に混つて、町や家の中で常住の家庭生活を営むやうに生れつゝいた人間ではなくして、見知らぬ土地を流浪し、海の上を漂泊するやうに生れつゝいた人間なのだといふ感情が私を捉へた、そして私の心には、神の胸に身を投じ、私の小さな生活を此の無限にして時を絶したものと親しく結びつけたいといふ昔ながらの悲しい欲求が、漠然たる衝動を以て込み上げて來た。

右は目下流行してゐるドイツ作家ヘルマン・ヘッセの作ペーター・カール・メンチンド、岩波文庫（青春彷徨）の一節であるが、常住の家庭生活を営まず、見知らぬ土地を流浪するといふのがヘッセの精神生活である。

かういふ彷徨流浪の人生觀が今日の高専大學の學生を惹きつける力を持つてゐる。しかしヘッセの美しい描寫に惹かれて意志的に貫かれゆくべき國民生活を遊離し永劫流轉の迷路

にふみ込むことを不斷に注意せねばならぬ。

ペーター・カール・メンチンドは廿七才の作品であるが、若きヘッセが、ひとりきり離された自己を永久の生命を有する神に結びつけたいといふ悲しき欲求をいだきつゝ、いかにせばそれが出来るかといふ所まで突込んでゐない。

「漂泊の魂」など最後の所はかなり隨順的であるが結局ヘッセはクリストのいふ隣人の愛、といふ同胞感に目覺め得ない人である。又それ故にその作品は隱遁超脫的日本のインテリには甘美なサタンのさゝやきの如くまつはりついてゆくのである。

隣人の愛に徹して行つたクリストの言葉は敬遠せられ、祖國愛に徹したソクラテスの言葉は難解として斥けられるのが今の世である。

現實の緊迫せる國民生活は一瞬の彷徨をも流浪をも許さない。固定概念理論の重壓よりのがれんとして彷徨文學に逃避せんとする者は人生の敗北者である。

緊迫せる國家生活に没入せむとする心をくちき國家生活を遊離せしむる魔力を有するものは所謂國際人なるものゝ言葉である。支那の林語堂の「生活の發見」などは道教の現代語譯ともいふべきもので、人間の權威の本質について左の如くいふ所によつても上のことが分るのである。

さてこの人間の權威といふものは、既に本書の冒頭で述べたやうに、支那文學の讚美の對象たる自由人の四つの特徴から成つてゐる。即ち、遊戲的好奇心、夢見る能力、その夢を訂正するユーモアの感覺、最後に所作の氣まぐれと奔放さである。この四つのものが合するとアメリカの所謂個人主義の教義を支那式に換骨脱胎したものになる、と。

而して彼は思想の取締といふものを極度に嫌ふ。本書のカバーについてゐる發行所創元社の推薦文に曰く

著者林語堂は國民政府の要人百數十人を殺さねば支那の改良は出来ぬと辛辣な批判をして、國民政府から追放された國際人だ。國家に破れ五千年の高血壓に堪えて來た支那民族は、人間として

「最もよき生活」の發見に苦心をする。支那人が眞に求める理想的な生活とは如何なるものか本書を讀めば、支那人の蕩々たる人生觀を視、支那民族が今日ある所以及び將來の運命をも充分推察出来るものがある。孔孟老莊に亞ぐ名著として今各國人に喝采されてゐる。

人間として「最もよき生活」を求めて到達した所が前に挙げた様な不得要領な人間の權威の本質を主張する個人主義なのである。まことに本書にあふるゝ林語堂の思想は、右の推薦文にもある如く蕩々たるものである。極端な専制とそれに對する極端な反撥と、國家の統治原理の確立しない支那はつねにこれをくりかへしてゐる。林語堂などはまことに公共生活に對する義務とか責任とかを全く解除された所謂「國際人」で、清談を事とする現代的竹林の賢人である。

日本に於いてはかゝる生活態度は不忠といふ外ない。今日林語堂をかつぐ人々の思想に注意せよ所謂林語堂の清談を紹介しよう。

人生には目的や意義が必ずなければならぬなどと、私は臆斷しない、「かうして生きてゐる、それだけで充分だ」とウォールトホイットマンもいつてゐる。生きてゐる。それだけで結構、おそろくまだ何十年も生きてゆくであらう、——こゝに人生といふものがある。それだけで結構、か

ういふ風に考へれば問題はおそろしく簡單になり、二つの異なる答が出てくる餘地がない。たゞ一つあるだけである。即ち人生を楽しむこと以外に、人生に何の目的があるか。サタンはかくうそぶきつゝ人を迷はさむとする。日本の學生はこれに對し猛然と反撥すべきである。人生に目的や意義はなくてよろしい、たゞ樂しめばよい、かゝる思想こそ人間をして結局物欲の奴隸たらしめる思想である。ホイットマンには全人生に没入せむとする統一的意志がある。林語堂にはこの統一意志がない。意志なく目的なく永劫流轉の迷路をたゞ生きてゆく「國際人」の批評はこれ位にしてをく。

### ホ、結 語

以上簡單乍ら流行文學の一端をごく要點のみ點檢した。國民生活の表面に流行浮動する文學の大部分が個人主義思想の表現であることは實に恐るべきことである。これこそ人生の根本にふれた文學なりと各々誇稱宣傳されつゝ何ら人生の根本問題を解決してをらぬものばかりである。

青年は多く變化ある人生の種々相を知らんとする欲求から文學作品をもとめるのであるが、それ

によつて反つてまことの人生の意義が分らなくなる危険が多分にあることに注意せねばならぬ。

殊に現代の青年は多くは文學のデイレッタントであつて、生命を賭した創作者は極めて少いのである、これこそ文化頽廢の凶兆である、青年學生は文化戰の戰士であるとは我等の主張であるが、精神の威力を明證し得る人物の全國的蜂起が今日程要求せられてゐる時代はない。勞作を限定しては所得と換算し、利害得失を先として止むに止まれぬ思ひを抑壓するのが現代の風潮である。

青年は若くして老ひ込み、燃ゆる如き情熱はすり減らされ、風の吹き様でどちらにでも靡きさうな様子をしてゐるのではまことに頼りない。文學なる語感にこもる軟弱感を拂拭せよ。不退轉の文化の戦ひにより文學の威嚴を回復し、日本文學の世界的威力を發揮せしめむことを我らの念願である。

人生は無常であり人間の精神は悲苦と歡喜、緊張と弛緩のをやみなき、交代動亂である。世間的名聲に瞬時も心奪はるゝ時、既に弛緩と墮落への一步をふみ出すことゝなる。

偉大なる人は永久の不滿を持ちつゞくる人である、そしてをりをりに惠まれる内的解脫感に無限の歡喜をうたひつゝ生くる人である。又偉大なる藝術は一切を統一する力をもつてゐる。



偉大なる精神を表現せる藝術は人をして忘我の境地に至らしむる絶大の淨化力を有する、しかるに現代の流行文學は殆んどかゝる精神を汚毒する役割を果してゐることを悲しまざるを得ない。

神典古事記にたゞへらるゝかなしく雄々しき節奏は私情をたちきり死を決して大君にまめやかに仕へまつる意志をどこまでも貫き來つた我祖先の悲劇的生の記録であるが、この節奏が世界を舞臺として日本人の胸中によりみがへる時、皇國ははかり知れぬ偉力を發揮するであらう。

徳川三百年の幕府時代に發達した庶民文學は、政治ときりはなされ、國家生活からきり離された文學となつてしまつた。その影響を未だに脱却出來ない爲、改革を意志するものはつねに慘憺たる苦闘を體驗せねばならぬのである。明治時代より正岡子規の精神を承繼して文學改革に死闘して來られた三井甲之氏のアカネ人生と表現誌上の長詩、論文評論などはこの苦闘の記録である。

夜半に (三井甲之氏「アカネ」第二卷第六號より)

一

苦しさに

聖者を思ひぬ、

「死せよ」と

そはみ教なりき。

二

死をいそぐもの

そは詩人なり、

美しと

人は見らめど。

三

心のいらだち

面は朱そゝぎ

まなこはうるめど

たゞ死せるごと

泉かれぬ、

雨はふれども。

明治四十一年の三井氏の作であるが、先輩の苦闘の跡を誌す血の一滴にも等しき作にも無限のおもひは味はゝるゝ。我らは永久の改革者であらねばならぬ。かくてはじめて國家の生命は防護され我らの生命もまもられるのである。

「精神科學の根本問題」

學生生活叢書第三輯

定價金四拾錢

昭和十五年八月十五日印刷  
昭和十五年八月十七日發行

編輯人

田所廣泰

印刷人

鈴木泰次郎

印刷所

朝日印刷營業所

東京市芝區新橋五丁目一番地  
電話芝一八七三番

東京市赤坂區青山北町一丁目一番地

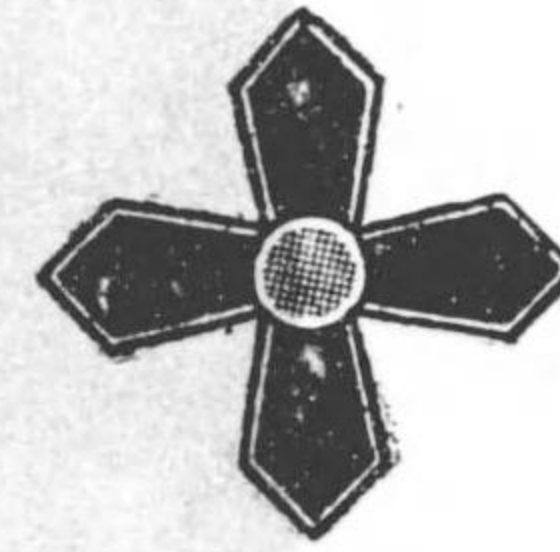
發行所

日本學生協會

振替口座東京一三〇、九六六番

408  
113

終



¥ .40